

第1 毛丹青氏との出会い (『がんばったで! 40年』407頁・408頁掲載)

坂和章平とすばらしき人たち～交遊録 4. 在日中国人作家 毛丹青 (マオ・タンチン) 氏 (事務所だより第11号 08年盛夏号)

◆10冊の著書を持ち、800万人のアクセスがあるブログをもつ、日本在住20年のバイリンガル作家が1962年北京生まれの毛丹青(マオ・タンチン)氏。そんな有名作家と中国語版『坂和的中国電影論』の出版について協議しながら楽しく食事したのは、私の行きつけのちゃんこ屋「神鷹」。08年3月19日のこの出会いをセットしてくれたのは、留学生の時から家族ぐるみにつき合いをしている山西省出身の女性郭小莉だ。人の出会いとは面白いもの。一目で互いの「個性的で濃いキャラ」を嗅ぎつけあい、書くことが大好きという共通点を持つ2人はたちまち大の親友に。

◆そんな毛氏の紹介で出席したのが、08年4月2日に開催された「中国の人気作家蘇童(スートン)が行く 関西の旅 歓迎座談会」(写真①)。その懇親会で私は弁護士稼業との2足のわらじをはく映画評論家として紹介され、『シネマ5』が配布されることに。



写真① 座談会の風景



写真② 蘇童氏との2ショット

その結果、蘇童(スートン)氏との2ショット(写真②)や女優田原(ティエン・ユエン)さんとの2ショット(写真③)が実現するとともに、たくさんの新たな友人が生まれることになった。

◆ヒット作を連発している毛氏の狙いは、女優との対談など、売れる本にするためにいかなる仕掛けをするかということ。月に1度開催されているたこ焼屋「にいたか」での「お茶会」などで、その戦略と戦術をじっくりと検討。毛氏は「僕が等身大の日本人と触れ合った感動を、多くの中国人と分かち合いたい」と語っていたが、そんな思いは私も全く同じだ(写真④)。と言ってる間に早々と、上海での出版社との顔合わせを兼ねた打合せと「毛丹青 v s 坂和章平の対談」の企画が浮上し、遂に8月22～24日の上海行きが決定した。中国語の本の出版のためには本格的な通訳と翻訳者が必要だから、東京から駆けつけてく

れるその先生とは上海で合流することに。その時期はまだ北京オリンピックの開催中だから、いろいろと大変だろうが、精一杯情報収集をし、出版の方向性を見極めたい。

◆毛丹青氏とのこんな交遊を大切に、私なりの日中友好と日中交流を広げ深めていく中で、中国語版『坂和的中国電影論』の出版を近い将来必ず実現したいものだ。



写真③ 女優の田原さんとの
2ショットに大感激！



写真④ 毛さんとじっくり話し合い

〈本書出版時点での追記〉

◆08年3月の毛丹青氏との出会いは、その後の私の中国向けの活動を決定づける大きな転換点となった。すなわち、それまでは観光がメインだった中国旅行も①彼の人脈を活かした大学での共同講演会や対談、②中国語での出版に向けた打合せや写真撮影に変化する中、現実には中国語の本が2冊も出版できることになった。また彼が09年に神戸国際大学教授に就任したことによって、彼の下に集まる中国人留学生諸君との交流が深まった。

◆そして最大のニュースは、『紅いコーリャン』（87年）の原作者である中国人作家・莫言の親友である彼の世話によって、2011年7月26日に私の事務所での「対談」の機会が持たれたこと。その莫言は、村上春樹有利の下馬評を覆して、2012年にはノーベル文学賞を受賞することになった。

◆彼が主筆として出版をはじめた中国の雑誌『知日』は、編集者が蘇静に変わった後に飛躍的に注目を集め、毎年8月に開催される上海ブックフェアでは中国の若者を中心に人気を集めている。私も『取景中国』と『电影如歌』の出版によって2009年夏と2012年夏の2度上海ブックフェアでの発表とサイン会を体験したが、そこでの『知日』の人気はすごかった。さらに2013年夏の上海ブックフェアでは、三浦友和氏の『相性』と見城徹氏の『異端者の快樂』を中国語に翻訳した本が2冊同時に発表され、毛さんの人気は急上昇中。今や、日中両国のマスコミ注目の的となっている。

◆そんな彼は優れたアイデアマンだから、私との一杯飲みながらの会食では必ず何らかの企画を提供してくれる。今後も末永く交遊を続け、少しでも日中交流の役割を果たしたいものだ。

2013年9月3日記